
マンドラゴラ畑でつかまえて ♪

H a n z o

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マンドラゴラ畑でつかまえて♪

【Nコード】

N9009X

【作者名】

H a n z o

【あらすじ】

日本の技術再興のため日本を代表する大企業、國枝重工が世界中からあらゆる職人を集めた新興の町、少閑町^{しょうかんちょう}。五年前からそこに暮らしている葛葉匠^{くすのはたくみ}は國枝工業の経営する私立少閑学園の高校二年生。彼は五月のある日曜日に情眠を貪っていた。そして、そこに運命が訪れる！そう、隣に越してきたイリーナ・フォルムングという名の同級生の“魔女”という運命が…！

始め

…キーツ…ボタン…、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ…

「オーライツ！！オーライツ！！オーライツ…！！」

…日曜の俺の朝の貴重な微睡みを満喫しようとした俺の目論見は、微妙に音階のズれる車のバックの警告音と威勢の良いおっちゃんの掛け声で見事に打ち砕かれた…。

「…んだよ…！」

日曜の朝なんだから静かにしろよな…」

がりがりと頭を掻きながらベットのうえで体を起こす。

…あーっ、気怠い…。あの起きるか起きないかのギリギリの意識のところで、もっともっと漂っていたかったのに…。誰だよ、こんな早くから！

…本当は早くはないんだ…。時計の針は10時を回っているのは知ってるんだ。

この時間にこんな生活音で起こされたからといって文句なんか言っていく所はないし、言ったところで質の悪いクレーマーと思われるだけだ。

だが俺は行動を起こすことにした。
所謂ところの八つ当たりって奴だ。

俺は気が短い。

だが怒鳴り込んだり殴り込んだり、暴力に訴えることはしない。

俺は武道なんか習っていないし体力に自信はない。なにより平和を好む、若干ひ弱寄りな高校二年生だ。…後、肝っ玉も若干小さめだ…。

じゃあどうするか？

…窓から俺を起こした現況を睨むんだ…。

…あははっ、まあ俺に出来ることはそんなもんだ…♪

…情けね…。

だが、俺はやると言ったらやる！

カーテンを乱暴に引き空ける。

幸いにも（？）音の元凶である車も兄ちゃん（おっちゃんじゃなかったんだ…）も、俺の部屋から見える位置に居た。

どうやら隣のやたらと庭の大きな新築住宅に引越らしい。

因みにだが、俺の部屋は二階の南東向きに位置している。

父さん曰く、人間はお天道様の光を浴びて起きるのが一番らしい。だから妹の鈴の部屋も俺の隣の南東向きだし、父さん達の寝室も一階の南東にある。

何を言いたいのかというと、道路に面する玄関側（これも因みにだが、鈴の部屋は裏庭側だ）の俺の部屋からはお隣さんの玄関やら庭がそっくり見えるという事を言いたかったんだ。

そしてカーテンを開けてCMでよく見る引越し会社のロゴが入った大型トラックと揃いの作業着で荷物を降ろして、隣に搬入している兄ちゃん達（マツチョで茶髪ばかり）を睨みつけようとした俺は見てしまったんだ。…美しい物を…。

その女の子はお隣に引越してきた子だろうと思う。

次の瞬間には俺の視界にはその一人の女の子しか居なくなった。
…いや、正確には睨みつけようとしたトラックと引越屋の兄ちゃん達やお隣の家やその後ろに広がる少閑町しょうかんちょうの新興住宅街が広がってるんだが、俺の視界の真ん中には女の子が居て後は只々白いバックが広がるだけだった。

最初は逆光だから影だけだった。それでも綺麗な女の子だと思っただ。

シルエットだけで麦藁帽子とスカートを着ているのが解った。
一枚のモノクロの絵画みたいに見えた。

段々と目が慣れてくるとそのモノクロの絵画に徐々に色が付き出した。

まず目に飛び込んできたのは亜麻色だった。

五月の風にそれはふわふわと揺れていた。

最初は羽根だと思った。…人に羽根なんか付いているわけないんだが…。

よく見るとそれは髪の毛だった。でも羽根と言われても俺は本気で信じていたかもしれない。

着ている白いワンピースは聖歌隊の着ている法衣のようにも見えた。

そう、それはもう天使といっても過言ではない装いだった。

勿論、装いや艶やかな髪の毛だけじゃなく、ぬけるような白い肌、形の良いツンと形良くとがった鼻、大きなハッキリとした垂れ目、気味の目に南の海のような瞳、桜色花びらのような可憐な唇と容姿もアイドルや3DCGアニメのヒロインのように美しかった。

背は160前後だろうが、ほっそりとした体に何故かボンツ！と存在感を示す胸。

車から出て肌寒かったのか、足下に置いていた大きめのトートバックから紺色のカーディガンを出して羽織った。

その動作の一連でもそのたわわな胸が揺れている。

…いや、揺れていらつしやいます。

…ほら、だって俺って“男の子”だもん…！

俺は寝起きのボーツとした気分も、微睡みを邪魔された怒りも、八つ当たりに睨みつけようとした事も、全て南億光年もの向こうにすっ飛んでいた。

何時の間にやら俺は窓を開けて窓枠を掴んで上半身を乗り出し穴が空くほどその美女を見つめていた。

その時、気紛れな五月の一陣の風が吹き抜け、麦藁帽子を吹き飛ばし家とお隣さんの境目まで転がってきた。

慌てて麦わら帽子を追いかけてくる女の子。

勿論、俺の視線はその女の子の走って揺れるむ…こほん…姿を追っていた。

女の子は帽子に追いつくとぱたと叩いてまた頭に被る。

不意に、そう不意にだ。女の子は上を、俺の方を見た。

勿論、目が合う。

ちよつとエメラルドグリーンの瞳が驚きに見開かれ…。

笑ったんだ。

そして辿々しくぺこりと頭を下げると、くるりと反転し小走りにお隣の家に入っていた。

小走りの途中で足下に置いていた鞆をすりりと掴んで行った時に転び掛けたのはご愛敬だ。運動神経は良くないらしい。

俺はそんな様子を、唯々見ていることしか出来なかった。

だって俺の心には一輪の大輪の華が咲いていたからだ。

その華の名は“恋”だ。

一目惚れだった。

俺は昼飯を呼びに来て無視されて腹を立てた鈴に回し蹴りをくら
うまでそのままだった。

初見

その日、俺はずっとフラフラとしていた。

朝のお隣さんの笑顔のせいだ。…いや、おかげだ。

そして偶に思い出し笑いをする。

その様子を見て俺に回し蹴りをキメた後、まだ夢心地の俺から事情を聞き出した鈴は「…キモい…」と言い、母さんは「病気かしら？」と心配し、父さんは「…青春だな…」と呟き縁側でパイプを吹かしていた。

外野の言葉なんかどうでもいい。俺は幸せだった。あの笑顔で胸もお腹もイッパイだった。…嘘です。腹は減ります。

夕飯の食卓に座っても俺は前後左右フラフラと揺れ、時折ニコリと微笑んで（鈴曰く、気持ち悪くニヤツいている）いた。

そんな俺の様子を鈴は配膳しながら時々自分の体を抱きしめて震えている。

どうやら気持ち悪いらしい。

…俺が…。

母さんは肉じゃがを鍋から鉢に盛りつけながら俺を無視していた。鈴から俺がこうなった理由を聞いて、「あら…」と言って放っておくことに決めたらしい。

…鈴の奴め、事情を言っちゃった後に正氣に戻って言いふらさないと約束させたのに…。

何故愛おしい兄との約束を破るのですか…。

…愛おしくないからですね…。

父さんは藍の甚平姿で椅子の上に器用に胡座を組み、食卓の対面の俺をチラチラ見ながらチビチビと晩酌をしている。鈴から事情を聞いて俺の様子が気にはなるらしいが何と言って良いのか解らな

いらしい。

父さんと母さんの出会いも父さんの一目惚れだったらしいと過去に聞いた記憶があるので、俺の唯一の理解者かもしれない。

…母さんに内緒で明日にでも徳利にお酒を少し足しておいてあげよう。

……俺の思考を読んだのか、俺を無視することにしていたはずの母さんが俺を一睨みした。

……母さん、何時から貴女は超能力者になったのですか…？

そんな葛葉家の平和な団欒（？）風景に訪問者がやって来た。

ぴんぽーん…

「はい！鈴、味噌汁お願いね！私が出るから先に食べてて！」

母さんは各自のご飯を食卓に並べ割烹着を手早く脱ぐと、椅子にそれを引っかけて玄関に小走りで行ってしまった。

「…しょうがないな、それじゃあ先に頂くか…。
いただきます」

父さんは徳利を二、三回振って最後の滴までお猪口に注ぎ、それをクイツと煽ると両手を自分の目の前で両手を合わせた。

通常、我が家は全員で食卓に座り手を合わせるのが家訓というか掟というか…、兎に角決まりになっている。

父さんの動きに合わせ俺も鈴も手を合わせる。

俺が手を合わせている前で湯気を上げている鈴がよそってくれた味噌汁には、何故か具が入っていないようだ。

具が少ない味噌汁かと思ったが、父さんや鈴のお椀にはお揚げやジャガイモや葱がたっぷり見える。

…中々気の利いた嫌がらせだ…。

男が食いものに愚痴々々言つなというのが父さんの教えだ。

…うん、後でおかわりしよう…。

そんな俺がご飯を一口食べて味噌汁を一口啜った時だった。

玄関から俺を呼ぶ母さんの声が聞こえた。

「匠、ちよつと来なさい！」

お客さんよー！」

俺に客？

俺は父さんと鈴と交互に顔を見合わせた。

「匠、お客さんを待たせちゃいかん。

早く行きなさい」

父さんは塩鯖をムシりながら俺を促した。

「…ああ、行ってくるよ」

俺は困惑しながら汁碗を食卓に置き、さらにそのうえに箸を置く
と玄関に向かった。

背中越しに鈴の安堵を表すらしい溜息が聞こえた。気持ち悪い俺
の姿を見ながら飯を食わずに済んだかららしい。…兄の妄想にまで
文句をつけないでもらいたいもんだ。…まあ、妄想を全面に押し出
している俺の方に問題があるかもしれんが、若気の至りということ
で許してほしい…。

……無理か……。

俺は報われない俺の人生を憂い（自業自得かもしれないが気にしない）、鈴に聞こえないよう小さく溜息を一つ吐くと頭をがりがりと掻きながら玄関に顔を出した。

「こんば……」

挨拶の途中で俺は固まってしまった。

だって妹に気持ち悪がられた理ゆ……いやいや、俺のハートを射抜いた本人が目の前に居たのだから。

そう、あの朝の亜麻色の御髪の美人さんだ。

今は肌寒いのか淡いピンクのスプリングコートを羽織っている。

……メツチャ綺麗……」

「今晚は。

そして初めまして。

今日、隣に引っ越してきたイリーナ・フォルムングと申します。どうぞ宜しくお願いします」

……うわー、滅茶苦茶綺麗だし、……声も綺麗だし、日本語も綺麗だし、……でも近くで見ると、以外と幼く見えるぞ……？、……高校生位かな……？、……ああ、何か素敵な香りがする……。

俺は玄関に繋がるリビングの入り口から顔を覗かせたまま、興奮と多幸と膨らむ妄想のあまり彼岸に旅立とうとしていた。俺の様子が変な事にイリーナ・フォルムングさんは小首を傾げた。

……はっつ、その仕草もかわええの……。

パンッ！！

「ほらっ、ぼくっとしてないで、匠もちゃんと挨拶なさい！
御免ねフォルムングさん、家の馬鹿息子が礼儀知らずで…」

柏手（？）一発で曾祖父ちゃんの所に船出しようとした俺の精神を正気に戻すと、母さんは苦笑しながら玄関に佇む美少女イリーナさんに頭を下げた。

「いえいえ、こんな時間にお邪魔した私が悪いのです、佳織さん。
それと、私は家族からリーナと呼ばれているので佳織さんもファミリーネームで呼ばずに気軽にリーナとお呼び下さい」

「あらそう？

じゃありーナちゃん、改めて宜しくお願いします」

…ほら匠、何時までボヘラッとしてないで挨拶、挨拶！」

母さんは俺につかつかと歩み寄ると、俺の耳を引っ張り廊下に引きずり出した。

イテッ、イテテテッ！！…ったく。

いつもならここで愚痴の一つでも言うところだが、惚れた女の子を目の前にしてそんな女々しい事が出来るわけもなく、温和しく挨拶することにした。

「…こ、今晚は。

葛葉 匠です。

…あの、その、よ、宜しく…」

「…何緊張してんのよ。」

「いっちょまえに色気付いちゃって♪」

「…鈴に報告ね…♪」

最後の方に何やら聞き捨てならない事を呟いている母さん。

「…おいおい、息子の家庭でのヒエラルキーを下げて何が楽しいんだ、母よ…。」

ゴシップ誌の記者のようにニヤつく(全国のコシップ誌の記者の方、ごめんなさい。完全な妄想発言です)母を無視し、何故俺がこの場に必要なのか訊ねた。

家族に紹介するなら父さんや鈴も呼ぶはずだからだ。

「…何だろ？」

「…あの、イリーナ・フォルムングさんが俺に用なんですか？」

「匠さん、私もお名前と呼ばせていただけますからリーナで結構ですよ♪」

「…。」

「…リーナと呼んで良いんだって♪良いんだって♪♪
再び旅立ちそうになる俺を母さんのジト目が妨げる。」

「…いかんいかん、このまま我が家のヒエラルキーの低下は避けねばならない…。」

早く内容を聞いてしまわなければ！

「…でもこの時間が永久に続けばいいのに…。」…あと、母さん居なくなればいいのに…。」

「…！母さんが俺を睨んだ！

本当に超能力者じゃないのか？

俺の安全が危ないので話を早く進めよう…。」

「…でリーナさん、何でしょう？」

「匠さんは少閑学園の高等部二年生だと佳織さんから伺いました。実は私も明日から少閑学園の高等部に通うので、馴れるまで一緒に登校して頂けないでしょうか？」

「…私、あの、す、凄い方向音痴なんです……」

「…何この可愛い生物…」

頬を赤らめ視線を下に落として手をお腹の前でモジモジ。

「…何この可愛い生き物…」

しかし願ってもない。こんな美人と一緒に登校できるなんて最高だ！

「わわ、わ、解りました！」

あの、喜んでお迎えにあがります！

その、その、明日の朝八時に出発で、ごほっ、いいいですか？」

「…舞い上がり過ぎよ、ばか…」

母さんの言葉なんか聞こえない、聞こえないったら聞こえない！

「ハイ、ありがとうございます。」

宜しく願いますね」

フフッ」

そんな喜ぶ俺と問題が解決し嬉しそうに笑うリーナさんに母さんが茶々を入れる。

「リーナちゃん、こんなんだけどいいの？」

俺を指さしリーナさんに詰め寄る母さん。

…失礼な、実の息子を信賴して下さい、お母様。

ほら、この澄んだ瞳を見て下さい。…白目の所は興奮で充血して
ますが…。

「実はご近所のどなたかに頼もうと思ったのですが、少閑学園高等
部に行かれているのが葛葉さんの所の匠さんだけだったので…」

…消去法ですか、リーナさん…。

「…そう、それならしょうがないわね。

匠、一緒に行つてあげなさい。

…変な所に連れ込んで変な事しちゃ駄目よ」

…母さん、貴女の瞳には可愛い我が子はどのように映っているの
ですか…？

何だか言いたい事が満載（主に母さんに）だが、まあいいや。下
手に反論して少閑学園小学部に通う鈴に案内の任務を横取りされた
らたまらない。

小学部は高等部から一区画離れているが、五分も早く家を出れば
鈴でも案内は可能だ。

ここは黙っているに限る。沈黙は“金”だ。

「…では夜分に失礼しました。

匠さん、明日は宜しく願いますね♪」

「はい、お迎えにあがります！」

「そんな！こちらがお願いしたのですから、朝はこちらがお伺いし

ますわ」

「いえいえ！これでも紳士ですからお任せください！」

「あら、そうですか？

フフッ、それではお言葉に甘えて…。

匠さんて親切なんですね♪

では失礼します」

ぎこちないお辞儀を一つすると、リーナさんは帰って行った。

「…匠、リーナちゃんのお家の間取りを調べたり、盗聴器をしかけたり、部屋から盗撮したら駄目よ…。

信じてるからね？」

「…いやいや、信じている息子に言う台詞じゃないよね？ないよね？不満顔の俺を余所に母さんは俺の肩をポンツと叩く。

「さっ、ご飯食べちゃいましょ♪」

母さんはサッサとリビングに歩いていった。

…何だかな…

お隣さんは秘密結社！？

工^{こう}井^い手^て予^よ市^し少^{せう}閑^{かん}町^{ちやう}は十数年前まで過疎に悩む小さな農家が幾つかが寄りよっているような小さな町だった。

だが世界にその名を轟かせる國枝重工の広報課課長、長野忠治氏（アメリカの超有名経済誌「マネー」で世界のリーダー百人に選ばれた傑物だ）が“物造りの日本の名前をもう一度世界に知らしめる”という突如掲げたプロジェクトのため、日本だけでなく世界中の職人を集め（この時点で物造り日本の意義が無くなったと俺は思うのだが、世界の誰も突っ込まなかった。「俺が白と言えば黒でも白と言え」を地で行っているのだろうか？）社員に職人教育をさせつつ、高度な技術のワンオフ製品を世界相手に商うというその教育の場であり製作の工房である場所を少閑町に選んだ事で後にこの町は劇的に変わることになる。

世界中の名工と呼ばれた老練な職人や安い労働力やハイテク機械の大量生産の怒濤の波状攻撃に耐えていた職人や若く希望や野望をその胸に抱いた職人等々、数人の様々な分野の職人達がこの計画に希望と未来を求めて集まった。

最初は「世界で五本の指に入る大企業がトチ狂ってバブルの時のようにジャパンマネーを無駄に使い出した」とか、「世界から見た自分を知らない愚かな日本人と金の亡者の職人達」とか、「國枝重工のカレンダーは一年中四月一日」とか、日本国内どころか世界中のマスコミの物笑いの種になっていた。

ところがそんな騒ぎも収まって人々の記憶から少閑町という言葉すら忘れ去られた八年後、その数人の職人達が世界の度肝を抜いた。正確にはその職人達の作った一機の飛行機にだが…。

それは唯の飛行機じゃなかったんだ。

——高々度旅客機——。

次世代の航空機のことだ。

大気圏外に一度出てもう一度大気圏に突入するというICBM（大陸間弾道ミサイル）のような軌道を描く飛び方をする。

メリットは空気抵抗のない所を飛ぶため飛行時間の大幅短縮が出来ること。東京―ワシントン間を二時間程度、東京―ロンドン間を三時間で飛べる物らしい。

デメリットは開発コストが莫大なのと大気圏内と大気圏外を飛べるエンジンが必要（最終手段として二種類のエンジンを積めば良いかもしれないがそれもコストを引き上げる要因になる）なのと運用コストが現行の航空機よりかかる事。

その他、細々とした問題はあったが要するに“お金”と“人”だ。過去いろんなアメリカや日本やロシア（昔はソ連といったんだっけ？）や中国など、名だたる大国が湯水の如く大金と人員とを使い、時には何力国で合同で開発に尽力しては頓挫してきた物を一企業の新興部門と数人の職人が事も無げに成し遂げてしまった。

おまけに主なデメリットであるお金の問題を全てうつちゃったのだ。

例えばその旅客機の表面を覆ったのは、煉瓦職人や瓦職人が國枝重工から与えられた一般的な耐熱素材をこねくり回して造った耐熱タイルだ。

機内の気密性を守るのが和紙職人が梳いた特別な（特別な素材を使っているといっても、これも一般に出回っている安価な物らしい）和紙だった。

フレームや翼に至っては鍛冶職人と木工職人（宮大工や欄間などを手掛ける欄間師や木工彫刻家）の合作の木と金属のハイブリットで出来ているという始末。

航行管制コンピュータ等の電子部品の一部や既存のジェットエンジンの供給を國枝重工の航空機部門開発課や宇宙開発部などからしてもらったものの、高々度旅客機のほぼ八割を職人さん達が手掛け

た安価な材料で完成させた。

ここまでの話で誰もが大きな疑問を持つだろう。紙や木材なんかで出来た飛行機が飛ぶなんて、第二次世界大戦末期の零戦じゃあるまいし、ましてやそれが宇宙空間を飛ぶなんてかなり無理じゃね？
って話だ。

歓声と驚愕と罵声とその他諸々（主に負のベクトル）の感情が飛び交った完成披露から二ヶ月後、人類の大方の予想を裏切り、高々度旅客機「いよっっ♪日本一号」（ネーミングセンス、無え…）は数十回のテスト飛行を何のトラブルを起こすことなくこなし、その実力を世界に知らしめた。

しかも燃料整備コストが従来の同程度の規模のジェット飛行機と同程度というデータのおまけ付きで。

それまで否定的な態度を取っていた国や研究機関や大学や科学者や評論家や知識人を自称する連中も認めざるをえなくなった。

そうなるが始まったのが高々度旅客機「いよっっ♪日本一号」の奪い合いだった。

販売はオークション形式で全世界生中継で行われた。

結局、最高額を提示した赤い御旗を掲げる一党独裁の国のとある研究機関が落札した。

…が、その数ヶ月後、その国のとある軍事基地から飛び立った航空機らしき物が日本海の遙か上空で大爆発を起こした。

対外的には新型エンジンの耐久実験で爆発は想定内だったと発表されたものの、全世界の本心の共通認識としては例の「いよっっ♪日本一号」の“コピー”の試験飛行が失敗して爆発したのだとなっている。

だがそれを表だって糾弾したところで誰も喜ぶ人はいない。喜ぶ人が居たとしたら、ゴシップ誌の出版社と八割がた捏造記事だと承知しても金を払ってそのゴシップ誌を買う民衆だけだ。

賢い組織達はそれに表だっては触れず（一応、領海内での“自称実験機”の爆発に日本政府は抗議をしたが、何時も通りの弱腰外交だったため蛙の面に小。だった）、國枝重工に接触を謀るのだった。だが國枝重工からの各国や研究機関への公式回答は「今回の旅客機と同様の物は製造致しません。次回の製品にご期待下さい」との素っ気ない物だった。

更にそれから五年。「M a g i c ・ H a n d s」という名称を名乗るようになった職人集団は少閑町から数々の作品を世に送り出した。

水の分子以外は完全に除去する一枚の布状フィルター（逆方向からの水圧で何度も再生可能）とか、極低音の環境から炎の中や高密度の放射線の中でも自由に活動できながらもその衣服の中の空間は快適な密封性作業着（外見もごてごてしてなくて、かなりスマートで格好良い）とか、SF映画とかアニメに出てくるようなボディーツツ状の宇宙服（外見がアニメのコスプレをしているように見えるのはご愛敬♪）等のそれはそれは凄い物から、像が踏んでも壊れないガラスのグラス（何故かワイニングラス）とか完全純物質で外的要因を受けない出目の確率が完全に六分の一のサイコロ（滅茶苦茶重い）とか植物だろうが金属だろうが高密度高分子繊維製の布だろうが人体を始めとする生体組織だろうが全てを色んな色に染める染料（勿論、完全無害で元の物の性質は変化無し）等、訳の解らない変チクリンな物まで色々あった。

それら全ては商品として売りに出したわけではない。

例えば純水を製造する超薄型フィルター、その名も「お手軽、純水作る君」（…センス無え…）は研究機関に販売する以外は全世界の水に困っている国の人達に造水機付きで寄付したし、完全防護服「素敵な無敵さん♪」（…本当にセンス無え…）は消防設備や原発災害や火山地域の設備の整っていない全世界の地域に寄付された（

金の有る国の消防防災関係やケミカル工場関係や原発地域や火山地帯では販売したみたいだ」。

まあ取り敢えず、慈善事業を優先し余ったら売りに出されたそれら全ての品はあつと言う間に買い手がついて売れていった。

…全てと言うからには、割れないワイングラス「頑丈ソムリエ三号」(…何故三号…?)とか、純物質のサイコロ「公平さん」(…サイコロに“さん”付けて…)とか万能染料「君を僕の色に染めてあげる」(…もはや名前でなく、台詞だよ…)とかも売れた…。

商品を買った組織等は、最初は高々度旅客機「いよっっ」日本一号」を買ったあの国のように、その技術を再現できないか色々やっていたようだが結局どの国のどの機関もそれを再現するどころか、解析することさえ出来なかったらしい。

当然、その後の世界の反応は“ほぼ”二つに別れる事になった。

すり寄る者と反発する者。

「M a g i c ・ H a n d s」の恩恵を受けようと國枝重工に接触する国・組織・個人。

「M a g i c ・ H a n d s」に対抗しようと研鑽に励む国・組織・個人。

『人類七十億、総職人時代到来?!』

…当時、とあるスポーツ新聞の一面を飾った見出しだ…。意味不明の表現ではあるが、加熱してしまった現状を表す妥当な表現ともいえた。

…まあ、前置きが長くなったが、こうして我等が少閑町に活気の火が灯ったわけだ。

移住してくる職人とその家族。

それらを相手に商売をしようとした人達。

「M a g i c ・ H a n d s」の秘密を探ろうとした産業スパイなんかもいるかもしれない。

そうなれば当然、町の人口も膨れ上がる。

そんな状況を想定していたのか國枝重工は町自体を、いや地域自体を一から創った。

鉄道・道路などのインフラを整備。

住宅地やマンションや学校や病院や商業施設や娯楽施設までを作り、住民の生活に支障が出ないようにした。

そして今も少閑町の町創り続けている。

この前、週刊誌で読んだ。

國枝重工の系列会社のニムラ自動車が持っているS県に本拠地を置くプロサッカーチームの本拠地を少閑町のある県に移そうとする計画があるらしい。町の郊外にスタジアムを建設しているので、これはほぼ間違いないだろう。

これが実現したとなると、この周辺の町に及ぼされる経済効果は数十億円になるとその週刊誌に書かれていた。

こんな話をダラダラしといてこんな事を言うのはなんだが、高校二年生になる俺（サッカー部にも入っていないしな）には難しい事は解らない。

ただこれだけは言える。

プレス打ち出し溶接板金旋盤職人（要は何でもやる鉄工職人）の父さんは五年前、この町に来てから楽しそうに仕事の話をするようになった。

前に勤めていた工場では当時住んでいたマンションに帰ってくると、溜息を吐いて酒を飲んで屁をコいて寝るだけだったあの父さんがだ。

だから俺達家族はこの町に越して来て良かったんだって思う。

…さて、この町の歴史はこんなもんかな？

今俺はお隣のフォルムングさんのお宅　の前に居る。

時間は午前七時五十分。待ち合わせの時間の十分も前だ。

…実は七時半からここに居る。張り切りすぎて三十分も早くに来てしまったのだ♪…あはは…。

…さて何故余所の玄関の扉の前で二十分も我が町の歴史を振り返っていたのか？

それは昨日一目惚れしてしまったリーナさんと仲良くなろうという俺の下心丸出しの考えに端を発する。

この何年かで少閑町には外国人の住人が増えた。俺が五年前に編入した少閑学園小学部六年にも何人もの外国人生徒が居たし、その後の五年でも何人もの外国人の転校生（日本人も居たぞ）が来た。そいつ等に共通の認識がある。『日本人は自分の国の歴史を知らない』ということだ。

その事で俺や他の日本人生徒は、外国人生徒から可笑しいと言われ続けた。

非道いときには自国の歴史を知らないとは何事だと叱られさえした。

どうやら諸外国の同世代達は愛国心に溢れ、自分の国に誇りを持ち、その証拠の一つとして自国の歴史を詳しく知っているらしい。

確かに俺達日本人（一部は除くが…）は他国の情報に詳しいわりに、自国の事を知らない。

特に日本史の時間なんかは睡眠時間と同じ意味を持つ（これはあくまで個人の意見だ。それに俺の日本史の成績は平均以上を保っている。…だが、テストさえ終わればその情報はデリートされる。なんて便利な俺の頭）。
過去何度か、一念発起し日本の歴史を知るべく図書館で歴史書な

ぞを読んでみたこともあったが、所詮は生半かな考えを元にした行動でたいした事なので成果を上げることなく昨日に至っていた。

だが俺のリビドー…、もとい恋の炎は凄まじい燃料となり、昨日の一晩で日本史の教科書を読破するだけでなくネットで調べた歴史サブカルチャーを暗記するまでに至った。

凄いで俺のリビドー…コホン…もとい恋の炎。

そして何故二十分も俺が人様の玄関の前で我が町の歴史を振り返っていたのかというと、ただ単にリビドー…もとい恋の炎の暑さで早起きしてしまった時間を利用し近々で必要となりそうな知識を復習していたのだ。

さて復習も終わったし、少し早いが彼女の家の扉を叩いてみるか…？

今時珍しい目の前の木製の扉に取り付けられたノッカーを手に取り、確か正式なノックは四回だったよな？と考えながらノックをする。

コンコンコンコン

「お早うございます、リーナさん。隣の葛葉 匠です。約束の時間より早いですけどお迎えにあがりした。」

ドンガラガッシャーン！！！！

途端に家の中から何かを盛大にひっくり返したような音が響いてきた。…何だ？

「…いたたっ…、お、お早うございます、匠さん…。もうそんな時間ですか？」

ありやりや、リーナさんを驚かせてしまったらしい。

「すみません、念のため十分位早めに来たんですけど…。」

…迷惑でした？

…あと、大丈夫ですか？」

「いえいえ、お気を使わせてしまって申し訳ありません。

…あの、私まだ普段着で制服に着替えなきゃならないので、少し待って頂かなくてはなりません。

…もしよろしければ、散らかってますがお部屋の中で待ってて頂けますか？」

何と！初日から彼女のお家に上げていただけるというイベント発生♪

これは行け行けどんどんといきましょう♪

「じゃあ、お言葉に甘えまして…。」

お邪魔しまーす…。」

ドアを引く。

『…あと、お手数をおかけして申し訳ありませんが、私をここから引きずり出して頂けますか？』

…何故彼女の声かくぐもっていたのか、ドアを開けて解った…。

…だってリーナさんったら、段ボールの山に押しつぶされてたんだもん。折り重なった段ボールの山の中腹辺りから、リーナさんの白い右手が見える。

… なんだか、シユール…

… はっ！ いかんいかん、さっさと助けなくては！！

「リーナさん、大丈夫ですか！？」

今助けますから！！」

俺は鞆を放り出し、慌てて段ボール山の発掘に取りかかった。

幸いにも重い荷物が入った段ボールは無かったらしく、どちらかと言うとひ弱な俺一人の力でも簡単に段ボールは退けられた。

五つも段ボールを退かせばリーナさんの体が見えてきた。… だが、その姿を確認した途端、俺は固まってしまった。

散らかった荷物の散乱する中、リーナさんは立ち上がり衣服の誇りをばんぽんと払うと、呆然としている俺の手を握り感謝の言葉を口にする。

『 いやー、申し訳有りません、匠さん。

助かりました、ありがとうございます♪ 』

… 普通、美少女に手を握られてお礼の言葉を述べられるというのは、ギャルゲーでいうところのフラグが立った（俺はギャルゲーをしない。三次元派だ）というんだろが、俺は依然として固まったままだった。

… だってさ、肝心のその美少女が完全に顔を隠すような黒い三角頭巾をすっぽり被り、黒いマント（ポンチョ？）を羽織っていれば誰でも俺みたいな反応をするだろう？

おまけに頭巾の額に当たるところには金色の刺繍のペンタゴン入りと来た。

… あーっと、ペンタゴンのマークということは取り敢えず白人至上主義者の団体（K・O・K）の方ではないらしい…。

『…あのー、どうしましたか？』

俺の手を握ったまま黒い頭巾の二つの穴からマリンプールの瞳が俺を見上げる。…これは何萌えに分類されるのだろうか…？というか萌える奴はいるのか？

…突っ込み所は満載なんだが、取り敢えず彼女を学校に連れて行かなくては。

「…あーつとリーナさん、制服に着替えなくちゃいけないんじゃないのかな？」

『あつ！そうでした！』

ちよつと待つてて下さい、直ぐに着替えてきますから！』

彼女は俺の手を離すとエントランスダイニングに併設された階段を駆け上がった。いった。

…あつ、マントの裾踏んでコケた…。

お友達になりました♪

俺は床に散らばった荷物を片付けている。

先程リーナさんが埋まっていた段ボール幾つかが開いて、中身が散乱していたのだ。

基本綺麗好きではない俺なんだが、他人様の家の中を不法にキョロキョロと見渡すわけにもいかず、かといってぼけーっとしているにも知らない場所では何だか居辛い。

…小市民な俺。

だが、片付けを始めた俺は今、非常に困惑している。

その原因は俺が今手にしているのはキャンドルスタンドだ。

何というか…、その…、人間の…骸骨…なんだ。しかも、作り物じゃなくリアルな奴。

良くできた作り物だなと内面を見たら医療番組で見た頭蓋骨の構造そのものだった。

軽く叩いてみたがプラスチックなんかとは違う硬質的な音がする。

…うん、何度見ても本物の頭蓋骨を使ったキャンドルスタンドだ…。

よく見れば他にも怪しげな雰囲気醸し出す物がワンサカとある。まず握り拳大の人の干し首。口と両目が縫い合わされているが、何故か小さくモゴモゴと動いている。

…電動の玩具だと思いたいが、手に持ってみた感じでは玩具とは思えないリアルな手触りでした…。

束ねられた枯れ枝みたいなのは、よく見たら蛇の干物でした。

…更によく見たら、蛇の頭が二つに分かれた二頭一身の蛇さん達でした…。

緩衝材で包まれた箱から覗いているのはガラスの容器にはいった

ホルマリン漬けらしき物。…中身は蝶の羽の生えた小さな人…。
フィギアだよね？作り物だよね！？

他にも怪しい草やら水晶球やら鳥の羽やら黒っぽい液体を満たしたの小瓶を沢山入れた小箱（人の頭蓋骨のマーク入り）やら針がハリネズミのように突き刺された人形やら…。

これでほんの一部なんだから、他の開いていない段ボールには何が入っているのか…。

何とか片付け終わった段ボールを積み重ね、俺は深く大きな溜息を吐いた。

…一刻も早く手を洗いたい…。

「あら、片付けて下さったのですか！？
本当に何から何まですいません」

声の方へ振り向くと、階段の中程で辿々しく頭を下げるリーナさんがいた。

どうやら制服に着替え終わったリーナさんが階段から下りてきていたようだ。

…綺麗だ…。

朝日に照らされて階段の中程に佇む制服美少女。

うちの少閑学園の制服は中々に可愛い・格好良い（勿論、着る人間による。俺は、…普通…かな？）と評判だ。

シャツは立て襟のピュアホワイトで前と袖ボタンは青いスワロフスキーガラス、青の紐ネクタイを首元で止めるのは校章をあしらった青と銀のネクタイ止め、濃紺のジャケットの胸ポケットと袖に今時珍しい膝下まであるプリーツスカートと同じ青と白と紺の押さえ気味の感じのチェック柄があしらわれている（男子の場合は当然同

じチェック柄のスラックスだ」。

… ネットの掲示板で見た事だが、一部の制服マニアの間では少閑学園のこの制服（勿論、女子のがね）がかなりの高値で取引されているとか…。偽物も出回ってるから制服鑑定士（…どんな職種だよ…）が大忙しだとか…。

制服に萌えない俺はそんな書き込みを見て眉唾物だと笑い飛ばしてたんだが、今の俺ならそれが解る気がする。

… だって、目の前に小首を傾げて立っている亜麻色の髪と南国の海の色の瞳を持った美少女が、そんな制服に身を包んでいるさまは一枚の絵画に等しかったから。… しかもかなりの名画。

これなら高値で取引されるのも肯ける！ぬうおー、可愛すぎるぞおー！！

「… あのだ、すいません…。私の制服姿って何だか変ですか…？」

… しまった…、俺があんまりじっくりと目の保養をしてたもんだから、彼女に疑問の念を抱かせてしまったらしい。

「… いやいやいや、別に变じゃないですよ！

… あのそれより、聞き難いんですけど、この段ボールの中身って何なんですか？

それにさっきのリーナさんの格好って…？」

思わず聞いちゃいました、俺。

だって気になるんだもん。

「その段ボールの中身は母方の家に代々伝わる家事道具なんです。それにあの格好は家着です。

… だらしない所を見せてしまつてごめんない…」

…何のお仕事なんでしょうか…？

困惑の色が俺の顔に現れたのだろう（顔色を隠すのは苦手だ…）、リーナさんは寂しそうに下を向いた。

「…そうですね…、やっぱり変ですね…。」

変なのは解ってるんです…。でも、母方の伝統なので、私はそれを守りたいだけです。

…だけど、前に住んでいたテキサスでも『お前は変だ』って言われて友達も出来なくて寂しかったんです…。

お父さんの仕事で日本に来たら友達が出来るかなって思ってたんですけど…。

…あれ、…私、何言ってるんだろ…。…あれ、何だか涙が…。
ぐすっ…、ふふっ…、やっぱり…こんな変な私には…友達なんか…

出来ないんだ…。」

…リーナさんが気丈にも、笑いながら泣いている。

俺が泣かしたわけじゃない。でも、罪悪感を感じる。…だって俺の表情が彼女の辛い過去を思い出させてしまったのだから。

彼女のために俺の出来る事。同情や慰めなんかじゃなく、本当にリーナさんのために出来る事。

それを本気で考えた俺の体は勝手に動き、口は勝手に言葉を喋っていた。

俺はリーナさんが中程に佇む階段を彼女の元まで駆け上がり、彼女の手を取った。

…うわ…っ、柔らけー！！

そんな邪念が浮かぶが、俺はそんな物をかなぐり捨てて叫んでいた。

「リーナさん、友達になろう!!」

「…へっ…?」

事態を飲み込めていないのか、リーナさんからは素っ頓狂の疑問が帰ってくる。

俺はもう一度、今度は噛みしめるようにリーナさんに語りかけた。

「リーナさん、友達になろう」

「…はい…」

呆けた返事の後、彼女は大輪の華のような笑顔をうかべた。

…うん、女の子は笑ってないよね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9009x/>

マンドラゴラ畑でつかまえて♪

2011年11月17日18時13分発行